

東京外国語大学
アジア・アフリカ言語文化研究所

要覧 1978



概 要

歴史と性格

アジア・アフリカ言語文化研究所は、人文科学・社会科学系では、わが国ではじめての共同利用研究所です。

本研究所の目的はアジアおよびアフリカの言語文化に関する総合研究、ならびにこれらの地域における諸言語の辞典編纂、および教育訓練を行なうことにあります。

すなわち：

- 1) アジア・アフリカの言語、およびそれを通じて、これらの地域の歴史・社会・文化を直接研究すること。
- 2) それらの言語による資料の利用を容易にするための辞典を作ること。
- 3) それらの言語習得を助けるため、言語研修を実施すること。

以上の三点が本研究所の主要な目的です。

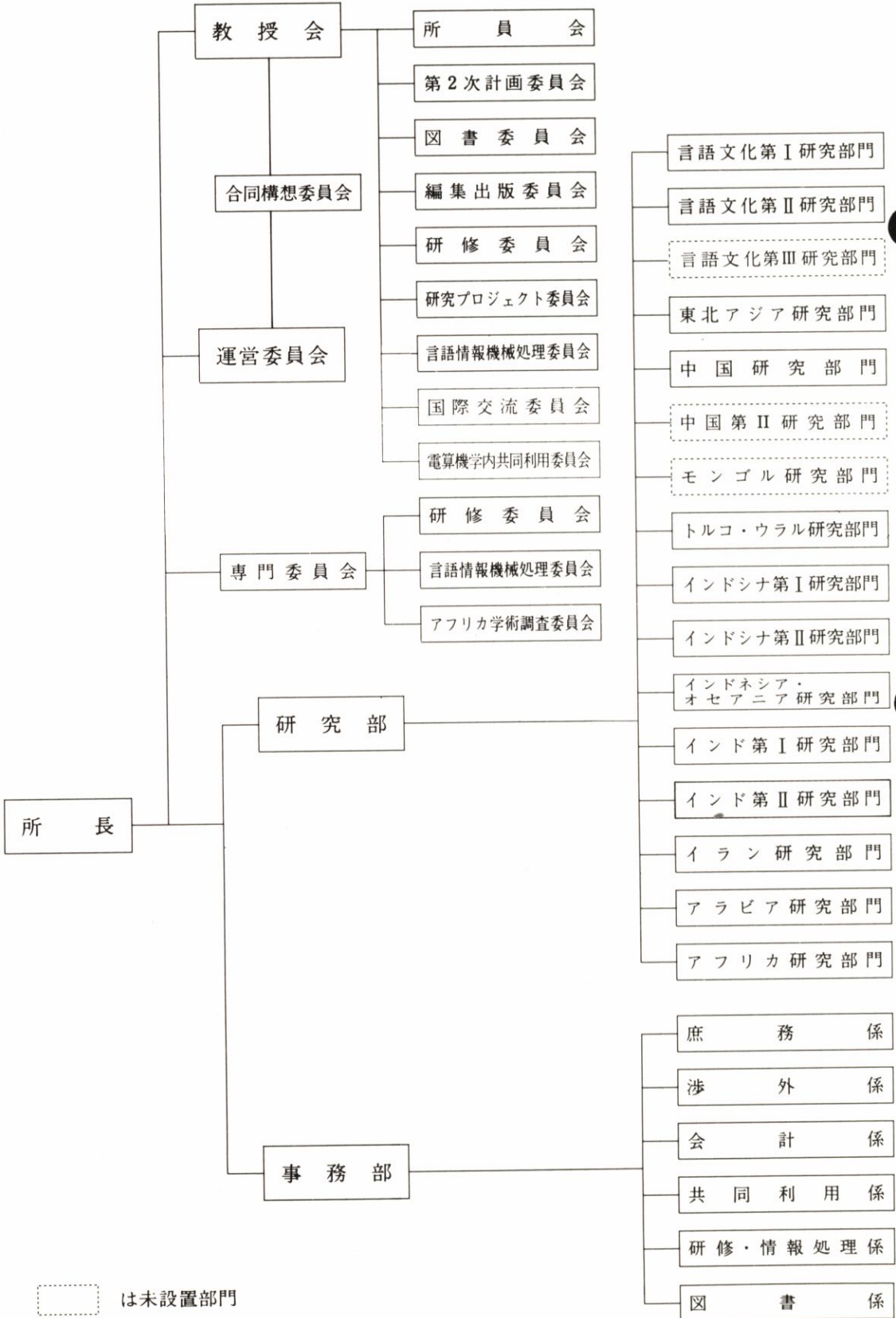
* * *

共同利用研究所はあらゆる種類の研究機関に所属する専門の研究者の便宜をはかるために設備や資料を提供し、相互の接触や交換の機会をつくり、それによって研究の発展・進歩を促すところにあります。

戦後日本の復興が進むとともに、その運命がアジア・アフリカ諸国と深くかかわりあっていることが認識されはじめました。このような背景のもとに1961年に学術会議がアジア・アフリカ言語文化研究所を設立するよう勧告しました。その後、各方面の理解と協力を得て、1964年4月1日に、東京外国語大学の附置の共同利用研究所として本研究所が設立されることになりました。以来、整備拡充が進み、今日では13部門の研究所に成長していますが、今後さらに3部門の増設が予定されています。



組 織



☐ は未設置部門

運営委員会

研究所の日常の業務の運営は、教授・助教授で組織する教授会において行われますが、共同利用研究所としての公開性を保つため、これとは別に運営委員会が置かれ、研究所の運営の基本方針などの重要な事項について、所長の諮問を受けます。運営委員には、研究所の教授・助教授、および所外の学識経験者など、25名以内が委嘱されます。1978年度の運営委員は以下の通りです。

荒 松 雄	東京大学教授	中 根 千 枝	東京大学教授
石 川 栄 吉	東京都立大学教授	西 田 龍 雄	京都大学教授
伊地智 善 継	大阪外国語大学学長	服 部 四 郎	東京大学名誉教授
梅 田 博 之	所員	伴 康 哉	大阪外国語大学教授
岡 田 英 弘	所員	坂 野 正 高	国際基督教大学教授
小 沢 重 男	東京外国語大学教授	藤 枝 晃	京都大学名誉教授
小 泉 文 夫	東京芸術大学教授	松 山 納	東京外国語大学教授
小 堀 巖	東京大学助教授	三根谷 徹	東京大学教授
柴 田 武	東京大学教授	護 雅 夫	東京大学教授
祖父江 孝 男	国立民族学博物館教授	山 田 信 夫	大阪大学教授
田 町 常 夫	九州大学教授	山 本 登	慶応義塾大学名誉教授
富 川 盛 道	所員	渡 辺 武 男	東京大学名誉教授

専門委員会

また、所長の諮問に応じて、研究所の共同研究に関する専門的事項を審議する専門委員会が三つあり、それぞれ所外の学識経験者のうちから委嘱されます。1978年度の委員は以下の通りです。

研修委員会

相浦晃(大阪外国語大学教授)、池上二良(北海道大学教授)、大東百合子(津田塾大学教授)、小沢重男、五島忠久(帝塚山大学教授)、柴田武、武居喜春(天理大学教授)、中根千枝、西田龍雄、服部四郎、半田一郎(東京外国語大学教授)、伴康哉、松山納

言語情報機械処理委員会

植村俊亮(工業技術院電子技術総合研究所主任研究官)、田町常夫、中山和彦(筑波大学教授)、長尾真(京都大学教授)、西村恕彦(東京農工大学教授)、
、 淵一博(工業技術院電子技術総合研究所研究室長)

アフリカ学術調査委員会

石川栄吉、泉井久之助(京都産業大学教授)、今西錦司(京都大学名誉教授)、岡正雄(元所長)、小堀巖、江実(岡山大学名誉教授)、祖父江孝男、中根千枝、服部四郎、山本達郎(国際基督教大学教授)、和崎洋一(天理大学教授)、渡辺光

研 究 活 動

共同研究プロジェクト

共同利用研究所での研究は、所員が個人研究テーマを持って研究を行なうとともに、所外の研究者と協力することになっています。そのために共同研究員の制度があり、共同研究プロジェクトを組織し、研究を進めています。1978年度のプロジェクトと共同研究員は以下の通りです。なおカッコ内は研究代表者です。

言語研修 (梅田博之)

井本英一 (大阪外大)	尾高晋己 (私立京都商業高等学校)	モルケ・カーゼンプール (大阪外大)
岩城雄次郎 (東京外大)	勝藤 猛 (大阪外大)	・アリー・キャンジェルー (東工大・大学院)
大野 徹 (大阪外大)	設楽国広 (都立第2商業高等学校)	ディアナ・キャンジェルー
岡崎正孝 (大阪外大)	千野栄一 (東京外大)	アティッラ・コルユレッキ
奥西峻介 (大阪外大)	西江雅之 (東京外大)	

辞典編纂プロジェクト (橋本萬太郎)

石沢良昭 (鹿児島大)	慶谷寿信 (都立大)	花登正宏 (山形大)
伊東照司 (東京外大)	坂本比奈子 (東京外大)	平井勝利 (名大)
糸賀 滋 (アジア経済研究所)	佐藤 進 (富山大)	福田権一 (中京大)
鶴殿倫次	沢田啓二 (天理大)	星 実千代
大田 斎 (都立大・大学院)	秦 宏一 (都立大)	本名信行 (金城学院大)
落合守和 (都立大)	鈴木陽一 (都立大・大学院)	増野 仁 (都立大・大学院)
小野 茂 (都立大)	荘司格一 (秋田大)	松尾良樹 (同志社大)
辛島 昇 (東大)	高橋 保 (大阪外大)	松村 潤 (日大)
川本栄三郎 (東北大・大学院)	戸川芳郎 (東大)	松村文芳 (鹿児島経済大)
川本邦衛 (慶大)	中川正之 (広島大)	松本 昭 (広島大)
神田信夫 (明大)	長尾光之 (福島大)	吉田 忠 (東北大)
木村英樹 (東大・大学院)	西田龍雄 (京大)	ネアック・ソック・チョムラン
日下恒夫 (関西大)	新田春夫 (東大)	チンタナー・保川 (東京外大)

言語処理研究 (加賀谷良平)

及川昭文 (筑波大)	杉田繁治 (国立民族学博物館)	星 実千代
沢村正信 (神戸商大)	中島 久 (青年海外協力隊)	堀口秀嗣 (筑波大)

アジア・アフリカにおけるイスラム化と近代化に関する調査研究 (三木 亘)

池田 修 (大阪外大)	片倉素子 (津田塾大)	後藤 晃 (東大)
石田 進 (中東経済研究所)	可児弘明 (慶大)	佐藤次高 (お茶の水女子大)
板垣雄三 (東大)	後藤 明 (山形大)	富岡倍雄 (神奈川大)

中村尚司 (アジア経済研究所)	本多義昭 (京大)	山形孝夫 (宮城学院女子大)
奴田原睦明 (東京外大)	前嶋信次 (慶大・名誉教授)	山田 稔 (東京外大)
福井勝義 (国立民族学博物館)	宮本常一 (日本観光文化研究所)	渡辺金一 (一橋大)

アフリカ学術調査 (富川盛道)

江口一久 (国立民族学博物館)	福井勝義 (国立民族学博物館)	米山俊直 (京大)
小川 了 (国立民族学博物館)	松園万亀雄 (横浜国大)	和崎春日 (日本学術振興会)
端 信行 (国立民族学博物館)	宮治美江子 (東京外大)	和田正平 (国立民族学博物館)

南アジアの大河流域における農村社会の研究 (原 忠彦)

石井米雄 (京大)	桐生 稔 (アジア経済研究所)	中村尚司 (アジア経済研究所)
白田雅之 (拓殖大)	菱口善美 (駒沢大)	水島 司 (東大・大学院)
長田満江 (アジア経済研究所)	重松伸司 (名大)	柳沢 悠 (横浜市大)
辛島 昇 (東大)	谷口晋吉 (一橋大)	

ヒマラヤ・チベットの生態・言語・文化に関する総合研究 (飯島 茂)

立川武蔵 (名大)	西田龍雄 (京大)
西 義郎 (鹿児島大)	星 実千代

アジア・アフリカ諸言語についての文法研究 (奈良 毅)

小田真弘 (中京大)	中島 久 (青年海外協力隊)	三谷恭之 (京大)
古賀勝郎 (大阪外大)	長 弘毅 (アジア・アフリカ語学院)	村崎恭子 (東京外大)
坂田卓二 (拓殖大)	縄田鉄男 (熊本大)	山田幸宏 (高知大)
崎山 理 (広島大)	橋本 勝 (大阪外大)	金 東 俊 (拓殖大)
田中敏雄 (東京外大)	早田輝洋 (九大)	渡辺吉鎔 (慶大)
田村すず子 (早大)	原 誠 (東京外大)	
鳥羽季義 (日本SIL)	溝上富夫 (大阪外大)	

インド・パキスタン分離独立の史的研究 (中村平次)

伊藤正二 (アジア経済研究所)	近藤 治 (追手門学院大)	森 利一 (広島大)
加賀谷 寛 (大阪外大)	田中敏雄 (東京外大)	山口博一 (アジア経済研究所)
古賀正則 (大阪市大)	浜口恒夫 (大阪外大)	山崎利男 (東大)

日本の言語文化比較研究資料の充実 (岡田英弘)

なお、1978年度より上記プロジェクトとは一応別に、当研究所において一定期間研究を行なう共同研究員を公募することになり、本年度は次の諸氏が委嘱されています。

小馬 徹 (文教大)	平戸幹夫 (拓殖大)
四宮宏貴 (北大・大学院)	村上泰子 (ICU・大学院)

言語情報機械処理

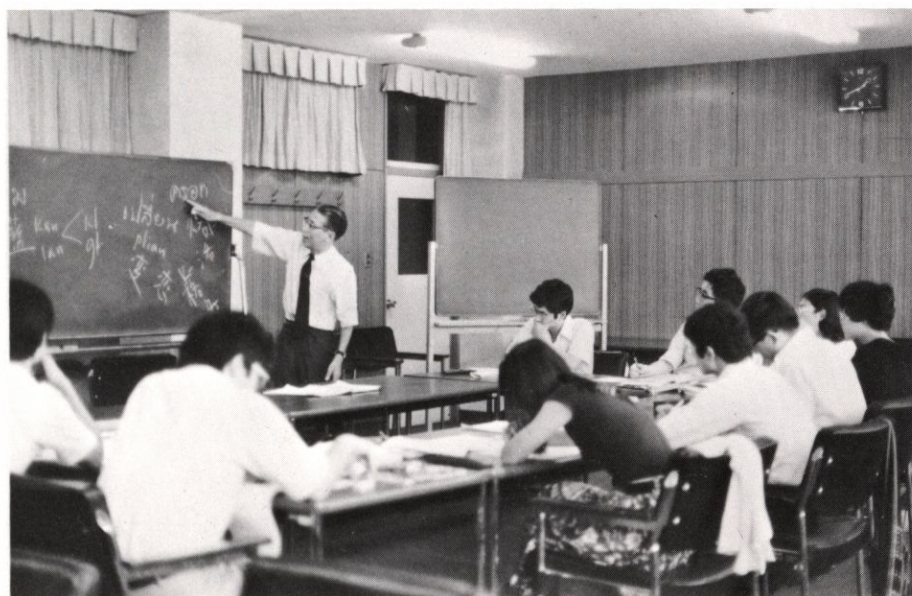
現代の電子工学の技術と数理情報の理論を高度に活用して、アジア・アフリカの諸言語の語料を大量に機械処理し、それぞれの言語の音韻論的、辞学的、統辞論的分析はもちろんのこと歴史学的、民族学的、社会学的研究のような多目的な用途に供せられるデータ・ベースの作製をはかっています。当研究所としては、最も重要な事業の一つであるアジア・アフリカの諸言語の辞典や文典の編纂に基礎資料を提供して、この方面におけるわが国の立ち後れを克服し、又アジア・アフリカ諸国との多面的、多角的交流という社会的要請にこたえようとしているわけですが、同時にこれは全国の研究者の共同利用にも供されます。この目的のために、一方で各言語の語料に一定の音韻論的、統辞論的、意味論的、辞学的情報を詳定しておき、他方ではこれらの情報を実際の研究に使いやすいようにプリント・アウトするために、トライコンやクウィックのようなプログラムが開発され、活用されております。アラビア語、中国語、朝鮮語、クメール語、スワヒリ語、タミル語、チベット語などのデータが蓄積されつつあります。

単語の用例検索例 (タイ語)

- キ-ワ-ド = เสร
- THAAMUA36421 เสร-พมาก-พูด-พับ-ขบทุก-ๆ-ใส่-ครบ-แล้ว-คำ-เอ-คำ-***
- THAAMUA17504 ครว-นี้-รู้-จัก-แล้ว-ว่า-ตัว-ผู้-ตัว-เมีย-เป็น-อย่าง-ไร ไม่-ยอม-ไม่-***
- THAAMUA12806 ส่วน-ผู้-ชาย-นั้น-มุ่ง-ทาง-เอง เพื่อ-ก็-มี-กระ-เป่า-พิน-ใส่-ๆ-สบาย จะ-ลุก-จะ-คาน-บง-โย-บง-ใจ-ไม่-ต้อง-
เป็น-ท้วง ผู้-หญิง-ต้อง-คาน-***
- THAAMUA09701 พูด-ชาย-ปลื้ม-กัน-เป็น-“-เรียง-” เรียง-หนึ่ง-มี-๒๐-ใบ-ซ้อน-เรียง-กัน-ให้-ก้าน-เรียง-กัน-เป็น-แถว-ใช้-นับ-ก้าน-**
- *
- THAAMUA33907 เจ็ด-ก็-ไม่-ยอม-*** จะ-เอา-๑-สตรงค์-ให้-ได้
- THAAMUA04701 แต่-บาง-ที-คุณ-อา-ก็-คุย-เรื่อง-ถูก-ครู-ทำ-โทษ-ที่-โรง-เรียน และ-เสียง-คุณ-อา-ซัก-จะ-ดัง-ขึ้น-เรื่อย-ๆ-จึง-ถูก-คุณ-
ปู่-ๆ-*** ทำ-ให้-หลาน-ๆ-ได้-แต่-ก็มี-และ-มอง-หน้า-กัน
- THAAMUA08712 เมื่อ-เวลา-จะ-กิน-กุ้ง ผู้-ใหญ่-มัก-บอก-ว่า “-ระวัง-นะ-กิน-หัว-กุ้ง จะ-ถูก-เรือ-สำ-เภา-คำ-*** เพราะ-
กุ้ง-มัน-กลืน-เอา-เรือ-สำ-เภา-ไป-ไว้-ที่-หัว-”
- THAAMUA07605 แต่-คุณ-ชาย-ไม่-*** เพราะ-ไม่-เห็น-คุณ-ภาพ-ของ-ต้น-ขอ-เลข ลูก-ก็-กิน-ไม่-ได้ สุก-แล้ว-ก็-เหม็น-จะ-คาย

言語研修

アジア・アフリカの言語の習得のための教育訓練は、わが国では開発がおくっていた分野ですが、その技術の開発のために、1967年からほぼ毎夏、実験的に、朝鮮語、ベンガル語、現代ヘブライ語、エチオピア語、スワヒリ語、ビルマ語（大阪外国語大学において）、福建語、チベット語の研修を、それぞれ一言語か二言語ずつ実施しました。1974年からは本格的に行なうことになり、当研究所員を中心にその言語を母国語とする人、及び日本人研究者の協力をえて、同年の夏には朝鮮語、チベット語の研修を行ない、それ以降1975年にはカンボジア語、ベンガル語、1976年には大阪でビルマ語、東京でペルシア語、スワヒリ語、1977年には大阪でモンゴル語、東京で広東語、マラーティー語、1978年には大阪でペルシア語、東京ではタイ語とトルコ語の研修がそれぞれ行なわれました。また1979年には大阪でタイ語、東京でハウサ語とビルマ語の研修が行なわれる予定です。全国から公募された各言語約10名の研修生は検定料、入所料、受講料を納付し、毎日6時間、全38日、合計226時間の研修を受け、全課程を終えた人には終了証書が授与されます。



海外学術調査

本研究所は、その性格上、アジア・アフリカの現地調査を行なうことが重要な機能のひとつとなっています。これまでに当研究所の所員によって組織された海外学術調査は以下の通りです。

- (1) アフリカ部族社会の比較調査 1969年～1977年
- (2) ヨーロッパ東南部農村調査 1970年
- (3) 東南アジア・ナショナリズムの形成過程における地域社会の変動 1972年
- (4) イスラム圏社会・文化変容の比較調査 1974年～
- (5) 中国・インド文明接触地帯における文化と生態に関する調査 1975年～
- (6) 南アジア河川流域米作地帯の農村社会の研究 1979年～



オマーン・ズファール地方の浜辺でイワシ（*‘ūma*）干しを手伝うバンツー系女性達。乾燥イワシは食料として、またラクダや羊、山羊などの家畜用飼料として、アラブ遊牧民たちによって内陸の砂漠地帯に運ばれる。ズファール地方は乾燥イワシの取引を通じて、海の民と砂漠の民が交流する接点である、といえる。
(家島彦一)

助手等の現地投入

アジア・アフリカの言語を自由に話し、読み、書くことができ、かつ、生活を通じてその文化を吸収した研究者を養成するために、本研究所は助手等の若い研究者を、それぞれ2年の期間、アジア・アフリカの諸国に送っています。

この計画は1967年から実施され、現在までに合計12名がエチオピア、タンザニア、ナイジェリア、アラブ連合、インド、モロッコ、香港、ケニア、ボツワナ、ザンビア、ザイール、ビルマ、ネパール等々の諸国に派遣され、そのうち2名は目下現地で研修中です。



香港、新界、大圍村の「太平清醮」。俗に「打醮」と呼ばれるこの道教祭礼は、大圍村の場合、十年一度の大祭である。時は丁巳十月十四日（1977.11.24）（辻 伸久）

外国人研究員ほか

研究所は、その共同利用研究活動の一環として、外国のアジア・アフリカの言語文化研究の専門家を外国人研究員として受け入れ、研究上の便宜を供与します。1978年度までの外国人研究員は以下の通りです。

- Gordon T. Bowles**
アメリカ 人類学専攻 1967年10月6日～1968年9月15日
- Muhammad Anis**
エジプト 近代史専攻 1968年10月2日～12月25日
- Raouf Abbas Hamed**
エジプト 近代史専攻 1973年4月1日～9月19日
- Yellava Subbarayalu**
インド 南インド中世史専攻 1973年10月1日～1975年10月31日
- Fe Aldave-Yap**
フィリピン フィリピン国語学専攻 1975年9月20日～12月21日
- 金完鎮**
大韓民国 韓国語学専攻 1975年8月20日～1976年7月31日
- Curtis D. McFarland**
アメリカ 言語学専攻 1976年2月20日～1977年2月19日
- 'Abd al-Rahîm 'Abd al-Rahmân 'Abd al-Rahîm**
エジプト 中東近代経済史・アラビア語学専攻 1976年6月6日～10月4日
- Salim Abdulla Wazir**
タンザニア 教育学専攻 1976年6月4日～10月11日
- Bhakti Prasad Mallik**
インド 言語学専攻 1976年7月13日～12月20日
- Karthigesu Indrapala**
スリランカ 歴史学専攻 1976年11月1日～1977年3月31日
- 俞昌均**
大韓民国 韓国語学専攻 1977年4月1日～1978年1月31日
- Søren C. Egerod**
デンマーク 東洋言語学・古典学専攻 1977年9月1日～1978年5月31日
- Bozkurt Güvenç**
トルコ 社会人類学専攻 1978年5月17日～10月31日
- Thubten Jigme Norbu**
アメリカ チベット学専攻 1978年6月27日～1979年3月31日
- André-Georges Haudricourt**
フランス 言語学、植物学、民族学専攻 1978年10月2日～10月31日
- Maria Lourdes S. Bautista**
フィリピン 言語学専攻 1978年10月23日～1979年4月22日

研究生

また研究生の制度があり、大学卒業かそれと同等以上の学力のある者が研究所で研究に従事することを希望するときは、研究生として入所を許可することがあります。研究生は入所料と研究料を納付し、指定の教官の指導を受けます。

施設

図書室

アジア・アフリカ研究に必要な図書および図書利用のための設備は、共同利用研究機関として重要な要素です。研究所開設以来図書資料は徐々に増加していますが、その充実については今後とも多大な努力を要します。蔵書の中にはアジア・アフリカ地域の国語教育資料、雑誌(約400種)、新聞(約60種)、世界各国語の聖書、などが含まれています。図書の外に、マイクロ資料、各種の語学レコードおよび録音テープなどもあり、また利用者の便宜を考えてマイクロリーダーとリーダー・プリンターを備えています。



音声学実験室

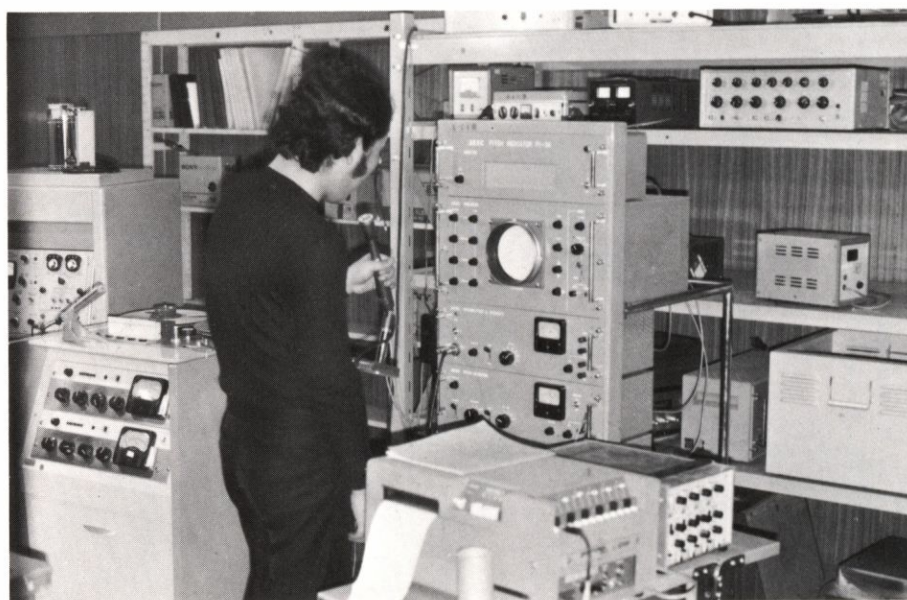
「アラビア語のイントネーションなんですけど、基本周波数の動きは？」

「広東語の声調の上がり下がりを目で見て確かめたいんですけど…」

「フラーニー語ってどんなことばですか？ 実際に録音したのがありますか？」

「言語研修に使う教材を、良い条件で録音したいんだけど……」

こんな例は、音声学実験室の活動のほんの一部分にすぎません。サウンド・スペクトログラフやピッチ・インディケーターをはじめとした音声分析用機器が、フィールド調査で収集された音声資料の処理にあたっています。また、めずらしい言語や、貴重な民話・民族音楽などのテープが複写され、ビデオ録画なども利用しながら研究分析を行っています。



電 算 機 室

当研究所では、昭和53年1月から、HITAC M-150システムを導入しました。内部メモリは512KB、ディスク装置は4スピンドルで合計800MB、磁気テープは2デッキあります。入力にはパンチカード、マークカード、紙テープが使えます。出力のためにはラインプリンタの他に漢字プリンタがありますが、これを使用して、大きさも形も様々なA A諸言語の文字を印刷できるようなソフトウェアが開発されています。

このほかのソフトウェアとしては単語の用例検索システムが準備されています。これはA A諸言語をローマ字や数字におきかえることをせずに、原字のままでパンチ、入力し、データベース化するもので、必要に応じて何時でも任意の単語(列)の用例を検索し、それぞれの固有の文字で印刷することができます。このシステムは、文法研究や辞典へんさんの資料作成ばかりでなく、史料や調査記録の索引を作ることもでき、言語学ばかりでなく、歴史学や文化人類学の研究にも活用できます。

またグラフィックディスプレイもあり、A A諸言語の研修の自動化等の開発研究も行なわれています。



職 員

所長（併） 北 村 甫

研 究 部（五十音順）

- | | |
|--|---|
| <p>教授 飯 島 茂：アジアの国民形成</p> <p>教授 石 垣 幸 雄：文論</p> <p>教授 梅 田 博 之：朝鮮語</p> <p>教授 大 江 孝 男：朝鮮語</p> <p>教授 岡 田 英 弘：東アジア史</p> <p>教授 北 村 甫：チベット語</p> <p>教授 富 川 盛 道：アフリカの社会と文化</p> <p>教授 中 村 平 次：インド現代史</p> <p>教授 奈 良 毅：インド・アリア諸語の研究</p> <p>教授 橋 本 萬太郎：シナ・チベット諸語</p> <p>教授 山 口 昌 男：文化記号論</p> <p>助教授 上 岡 弘 二：イラン語</p> <p>助教授 川 田 順 造：西アフリカ社会</p> <p>助教授 坂 本 恭 章：オーストロアジア諸語</p> <p>助教授 土 田 滋：オーストロネシア諸語</p> <p>助教授 中 野 暁 雄：セム・ハム諸語</p> <p>助教授 永 田 雄 三：トルコ近代史</p> <p>助教授 原 忠 彦：イスラム教と社会</p> | <p>助教授 日 野 舜 也：アフリカ都市社会の比較研究</p> <p>助教授 三 木 亘：イスラム近代史</p> <p>助教授 守 野 庸 雄：日本語・スワヒリ語対照研究</p> <p>助教授 家 島 彦 一：イスラム中世史</p> <p>助教授 湯 川 恭 敏：理論言語学・パントゥ語</p> <p>助 手 石 井 溥：南アジアの人類学</p> <p>助 手 加 賀 谷 良 平：音響音声学</p> <p>助 手 清 水 宏 祐：西アジア史</p> <p>助 手 新 谷 忠 彦：シナ・チベット諸語</p> <p>助 手 高 知 尾 仁：アフリカの象徴論</p> <p>助 手 辻 伸 久：中国語</p> <p>助 手 内 藤 雅 雄：インド近代史</p> <p>助 手 中 嶋 幹 起：中国語</p> <p>助 手 羽 田 亨 一：イラン史</p> <p>助 手 松 下 周 二：アフリカの言語</p> <p>助 手 森 幹 男：インドシナ比較文化史</p> <p>助 手 藪 司 郎：チベット・ビルマ諸語</p> <p>助 手 山 本 勇 次：東南アジアの文化人類学</p> |
|--|---|



北カメルーン Ngaoundéré の壁画から。「フルベ族の行列」（日野舜也）

事務部

事務長 大田 脩生
文部事務官 佐宮 森 てる子

庶務係

係長 戸田 孝司
文部事務官 井上 由美子
文部事務官 松本省三
文部事務官 福井 光雄
文部事務官 (タイピスト) 依田 かつ子
文部技官 (自動車運転手) 埜 和雄

渉外係

係長 隅田 浩
文部事務官 松岡 環
文部事務官 佐久間 敬喜

会計係

係長 安田 隆
文部事務官 田川 恵二
文部事務官 石川 房江
文部事務官 成瀬 智
文部事務官 田村 猛
文部技官 富澤 貞夫
文部事務官 (守衛) 金子 鍵蔵
用務員 植田 カツエ
用務員 横田 英一

共同利用係

係長 遠藤 吉則
文部事務官 金井 京子
文部事務官 鈴木 喜久子
文部事務官 津田 貞子
文部事務官 渡辺 勇二

研修・情報処理係

係長 石橋 徳三郎
文部事務官 岡田 ほなみ
文部事務官 中嶋 弘子
文部技官 今井 健二

図書係

係長 斉藤 醇
文部事務官 石川 恵子
図書主任 文部事務官 中川 陽子
文部事務官 植木 天津子
文部事務官 須郷 知子
文部事務官 大村 和子

—— 表紙の写真説明 ——

アフリカのヴィクトリア・フォール。ザンビア側から見たものであるが、ローデシア側からはもっと大規模な部分が見えるという。滝つぼのすぐ上まで行けるが、しぶきでびしょぬれになる。水煙は何キロも離れたところからも見える。

(湯川恭敏)

出版物一覽

アジア・アフリカ言語文化研究 *Journal of Asian and African Studies*, Nos. 1(1968), 2(1969), 3(1970), 4(1971), 5(1972), 6(1973), 7(1974), 8(1974), 9(1974), 10(1975), 11(1976), 12(1976), 13(1977), 14(1977), 15(1978).
アジア・アフリカ言語文化研究所 通信, Nos. 1~33. (1966~78).

アジア・アフリカ言語文化叢書

1. ピア・アヌマーン・ラーチャトン著・河部利夫訳註, タイ農民の生活, 1967.
2. 家島彦一訳註, イブン・ファドラーンのヴォルガ・ブルガール旅行記, 1969.
3. MATSUSHITA, S., *An Outline of Gwandara Phonemics and Gwandara-English Vocabulary*, 1972.
4. NAKANO, A., *Conversational Texts in Eastern Neo-Aramaic (Gzira Dialect)*, 1973.
5. TSUCHIDA, S., *Recostruction of Proto-Tsouic Phonology*, 1976.
6. NAGATA, Y., *Muhsin-Zâde Mehmed Paşa ve Âyânlik Müessesesi*. 1976.
7. YAJIMA, H., *A Chronicle of the Rasûlid Dynasty of Yemen*, 1976.
8. MCFARLAND, Curtis D., *A Provisional Classification of Tagalog Verbs*, 1976.
9. MCFARLAND, Curtis D., *Northern Philippine Linguistic Geography*, 1977.
10. HASHIMOTO, M.J., *Phonology of Ancient Chinese*. Vol. 1, 1978.

アジア・アフリカ基礎語彙集

- | | |
|----------------------------|------------------------------|
| 1. 山本謙吾, 満州語口語基礎語彙集, 1969. | 5. 石垣幸雄, エチオピア比較語句集, 1974. |
| 2. 梅田博之, 現代朝鮮語基礎語彙集, 1971. | 6. 守野庸雄, スワヒリ語基礎語彙用例集, 1975. |
| 3. 橋本萬太郎, 客家語基礎語彙集, 1972. | 7. 坂本恭章, モン語語彙集, 1976. |
| 4. 和田正平, イラク語基礎語彙集, 1973. | 8. 中嶋幹起, 閩語東山島方言基礎語彙集, 1977. |

共同研究報告

1. アジア・アフリカ諸国における国語教育資料の調査研究——中間報告, 1966.
アジア・アフリカ諸国——国語教育資料目録, 1967.
2. アジア・アフリカ言語調査票, 上(1966), 下(1967).
3. 「イスラム化」に関する共同研究報告, Nos. 1(1968), 2(1969), 3(1970), 4(1971), 5(1972), 6(1973).
4. 現代インド・パキスタン文学共同研究報告, Nos. 1(1970), 2(1971), 3(1972).
5. アジア・アフリカにおける宗教運動共同研究報告, Nos. 1(1972), 2(1972), 3(1973).
6. アジア・アフリカ文法研究, Nos. 1(1972), 2(1973), 3(1974), 4(1975), 5(1975), 6(1977)
7. *Asian and African Grammatical Manual* (アジア・アフリカ文法便覧), 1972~:
No. 11. Korean(梅田博之), 1973.
11z. Ainu(村崎恭子), 1978.
12b. Fukienses(中嶋幹起), 1976.
12z. Tibetan(北村 甫), 1977.
13b. Marathi(内藤雅雄), 1976.
13y. Malayalam(伊藤正二), 1978.
14a. Cambodian(坂本恭章), 1974.
14b. Burmese(藪 司郎), 1974.
14c. Thai(森 幹男), 1975.
15b. Philippine(山田幸宏, 土田 滋), 1975.
16b. Samoan(小田真弘), 1977.
17. Persian(上岡弘二), 1976.
20. African(石垣幸雄), 1975.
21. Swahili(守野庸雄), 1976.
22a. Cushitic(石垣幸雄), 1972.
22b. Ethiopic(石垣幸雄), 1978.
23. Hausa(松下周二), 1974.
26. Fulfulde(江口一久), 1974.
33. Romance & Greek(石垣幸雄), 1973.
33z. Maltese(石垣幸雄), 1977.
36. Uralic etc.(石垣幸雄), 1976.
8. アフリカ部族社会の比較研究: 1. アフリカ部族社会の特質をめぐって(1971), 2. アフリカ社会の地域性(1973).
9. トルコ民族とイスラムに関する共同研究報告, 1(1974).
10. アジア・アフリカ語の計数研究, 1(1975), 2(1975), 3(1976), 4(鄒 嘉彦: 老乞大諺解単字索引, 1976), 5(坂本恭章: カンボジア語小辞典, 1976), 6(1976), 7(1977), 8(1978), 9(1978).
11. *Oceanic Studies*, No. 1(1976).

12. インド・パキスタン分離独立の史的研究 資料集1 (1976), 2 (1977).
13. 南アジアの大河流域における農村社会の研究: 南アジア農村社会の研究, 1(1977), 2(1978).
14. ヒマラヤ・チベットの生態・言語・文化に関する総合研究: YAK, 1(1977).

AFRICAN LANGUAGES AND ETHNOGRAPHY

1. EGUCHI, P. K., *Miscellany of Maroua Fulfulde (Northern Cameroun)*, 1974.
2. MATSUSHITA, S., *A Comparative Vocabulary of Gwandara Dialects*, 1975.
3. MOHAMMADOU, E., *L'Histoire des Peuls Férôse du Diamaré: Maroua et Pèttè*, 1976.
4. EGUCHI, P. K., (tr.), *Shi'r al-Tuba (Poem of Repentance)*, 1976.
5. WADA, S., *Hadithi za Mapokeo ya Wairaqw (Iraqw folktales in Tanzania)*, 1976.
6. NAKANO, A., *Dialogues in Moroccan Shilha (Dialects of Anti-Atlas and Ait-Warain)*, 1976.
7. TANAKA, J., *A San Vocabulary of the Central Kalahari-G//ana and G/wi Dialects*, 1978.
8. MOHAMMADOU, E., *Les Royaumes Foulbe du Plateau de L'Adamaoua au XIX siècle*, 1978.
9. MATSUSHITA, S., *In a Small Town on the Benue—Fula Texts from Gongola State, Northern Nigeria*, 1978.
10. HINO, S., *The Classified Vocabulary of the Mbum Laguagd in Mboung Mboum—with Ethnographical Descriptions*, 1978.
11. EGUCHI, P. K., *Fulfulde Tales of North Cameroon I*, 1978.
12. MOHAMMADOU, E., *Catalogue des Archiales Allemands du Cameroun*, 1978.

STUDIA CULTURAE ISLAMICAE

1. NAKANO, A., *Basic Vocabulary in Standard Somali (I)*, 1976.
2. MIKI, W., *Index of the Arab Herbalist's Materials*, 1976.
3. YAJIMA, H., *The Arab Dhow Trade in the Indian Ocean*, 1976.
4. NAGATA, Y., *Some Documents on the Big Farms (Çiftliks) of the Notables in Western Anatolia*, 1976.
5. MIYAJI, K., "Kacem Ali"—*Monographie d'un domaine autogéré de la plaine de Mitidja (Algérie)*, 1976.
6. MIYAJI, M., *L'Emigration et le changement socio-culturel d'un village Kabyle (Algérie)*, 1976.
7. MIKI, W. & Abd al-Rahim., *Village in Ottoman Egypt and Tokugawa Japan—A Comparative Study*, 1977.

MONUMENTA SERINDICA

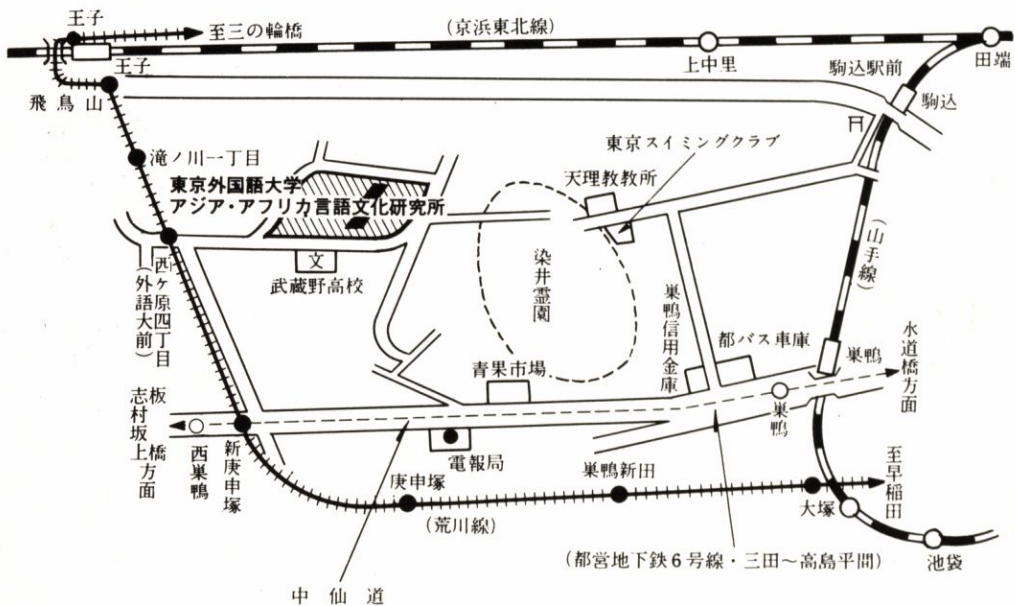
1. IJIMA, S. (ed.), *Changing Aspects of Modern Nepal—Relating to the Ecology, Agriculture and Her People*, 1977.
2. HASHIMOTO, M. (compl), *The Newari Language—A Classified Lexicon of its Bhadgaon Dialect*, 1977.
3. KITAMURA, H. (ed.), *Glo Skad—A Material of a Tibetan Dialect in the Nepal Himalayas*, 1977.
4. MATISOFF, J. A., *Mpi and Lolo-Burmese Microlcrolinguistics*, 1978.
5. HOSHI, M. & Tondup Tsering, *Zangskar Vocabulary—A Tibetan Dialect Spoken in Kashmir*, 1978.

言語研修テキスト

- | | |
|--|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. チベット語, 北村甫ほか編, 全5冊 (1974). 2. 朝鮮語, 梅田博之ほか編, 全3冊 (1974). 3. カンボジア語, 坂本恭章ほか編, 全5冊 (1975). 4. ベンガル語, 奈良毅編, 1冊 (1975). 5. ビルマ語, 大野徹ほか編, 全5冊 (1976). 6. ペルシア語, 上岡弘二ほか編, 全3冊 (1976). 7. スワヒリ語, 守野庸雄ほか編, 全2冊 (1976). | <ol style="list-style-type: none"> 8. 広東語, 中嶋幹起ほか編, 全4冊 (1977). 9. マラーティー語, 内藤雅雄ほか編, 全3冊 (1977). 10. モンゴル語, 荒井伸一ほか編, 全4冊 (1977). 11. トルコ語, 永田雄三ほか編, 全3冊 (1978). 12. タイ語, 坂本恭章ほか編, 全2冊 (1978). 13. ペルシア語, 勝藤猛ほか編, 全3冊 (1978). |
|--|--|

INSTITUTE FOR THE STUDY OF LANGUAGES
AND CULTURES OF ASIA AND AFRICA

TOKYO GAIKOKUGO DAIGAKU
4, NISHIGAHARA, KITA-KU, TOKYO 114
TEL. 03-917-6111
Cable Address : GENGOBUNKAKEN TOKYO



東京外国語大学
アジア・アフリカ言語文化研究所

東京都北区西ヶ原 4丁目51番21号 〒114

TEL 03-917-6111

国電大塚又は王子下車・都電荒川線西ヶ原4丁目
(外語大前) から徒歩約5分

地下鉄・都営6号線西巣鴨下車15分